

書評

Jason Stanley,
*Language in Context:
Selected Essays.*
Oxford University Press, 2007.

大川祐矢

1. はじめに

言語研究における二つのインターフェース—意味論 semantics と語用論 pragmatics—については、かねてより、それらが占有する領域を巡って様々な議論がなされてきた。本書はその論争の中でも「指標主義」と呼ばれる立場の代表的論者である Jason Stanley の論文集である。本書に収録された七編の論文は論争における彼の立ち位置を把握し、それが論争全体についていかなる意義を持つかを理解する上でいずれも重要なものであるが、今回は彼の主張がより端的に現れている‘Context and Logical Form’および‘On Quantifier Domain Restriction’の二編に焦点を合わせて論評を行うこととする。

本編に入る前に、彼が目標とすることがいかなることであるのかを、彼自身の言葉を引用して確認しておこう。

発話とその直観的な真理条件との関係について考えを深めることにより、[次の]二つの事実について説明することを目的とする。一つは、われわれはこれまで出会ったことのないような文から世界についての情報をスムーズに得られる、という事実。もう一つは、同じ文であっても、使用される文脈によって、世界について異なる種の情報を伝達することがよくある、という事実である。(本書 p. 17、[] 内は大川)

Stanley はこの目的を、発話とその直観的な真理条件とがいかなる関係を持つかを探究することにより達成しようとする。このプロジェクトがいかにして為されていくのかについて、2.で‘Context and Logical Form’で述べられた Stanley の基本的な主張を確認し、3.で‘On Quantifier Domain Restriction’で成されたその主張の具体的な定式化を確認する。

2. ‘Context and Logical Form’ (本書 pp. 30–68)

2.1 意味論／語用論の区別

‘Context and Logical Form’で、Stanley は意味論と語用論の代表的な区別の仕方として次の三つを提示している (本書 pp. 32-3)。

- (a) 意味論は文脈に関係しない言語的な意味の研究を意味し、語用論とは文脈依存的な個々の言語的コミュニケーションの研究を意味する
- (b) 聞き手による論理形式logical form⁽¹⁾の構成要素への外延割り当てと、論理形式に沿った意味値の結合（指標子はそれらのガイドとして働く）の段階が意味論であり、その結果についてのGrice的な会話の格率に沿った評価の段階が語用論である
- (c) 意味論は真理条件や命題の研究であり、語用論はそのような真理条件や命題をインプットとして受け取り、言語行為により含意された他の命題を導出するような解釈プロセスの研究をさす

ここで Stanley は(b)にコミットするとされているが、仮に彼の見解が正しいのであれば、(b)と(c)は一致するという。つまり、意味論が外延割り当てと意味値結合のみでなく、真理条件をもその対象として扱えるようになるのだ。では、それを可能にする見解とは何か。

2.2 「本来の構造」という考え方

Stanley は、普段われわれが発話する文の構造というのは、文が持つ「本来の構造」の一部でしかなく、自然言語の文には隠された複雑性があると主張する。その上で彼は「言語外的な文脈により与えられるあらゆる真理条件的な影響は、論理形式へとトレースできる」(本書 p. 30)、つまりは、「あらゆる真理条件的な文脈依存関係は、自然言語文の「本来の構造」における文脈依存的な要素の意味値を指定することにより生ずる」(本書 p. 31)と主張する。

「言語外的な文脈により与えられるあらゆる真理条件的な影響」とは、一般的に言って意味論の範疇ではなく語用論の範疇に含まれるべきものである。何故なら、すでに言語外的な文脈がそこでは関係しているからだ。しかし Stanley の主張によれば、それらは「論理形式へとトレースできる」という。ここでの論理形式とは、実際に発話された文の統語論的構造のみでなく、文が本来持っているが、実際には発音されていないような統語論的構造のことである。そのような文の「本来の構造」には、「文脈依存的な要素」が含まれており、その「意味値を指定」してやることで、「真理条件的な文脈依存関係」が生じてくる

という。つまり、「真理条件的な文脈依存関係」とは、文が本来持っている統語論的構造から言語外的な文脈への参照要求に起因するのだ。仮にこれが正しいとすれば、真理条件は純粋に語用論により扱われるものではなく、意味論の対象となるべきものであると言えるだろう。故に2.の(a)と(b)は一致することになる。

以下でこの見解を擁護するために Stanley が展開した議論を見ていこう。

2.3 真理条件的語用論への応答

上述のように、Stanley は文の「本来の構造」という考え方を持ち出すことで、真理条件もまた意味論の対象となることを擁護しようとした。しかし一方で、発話された文が命題となるためには、つまりは真理条件的となるためには、語にエンコードされた規約的意味のデコードのみならず、言語外的な文脈を参照することが必要となる場合がほとんどだ。そのことを論拠に、真理条件に本質的に関わるのは意味論ではなく語用論であるとする論者、つまりは Stanley の言う論理形式を考慮する必要性を認めない論者が多数いる。

Stanley はこのような論者（以後、真理条件的語用論者と呼称する）に対し何らかの応答をする必要があろう。その応答をここで概観する。

最初に、真理条件的語用論者たちと Stanley が共有している前提を確認する（本書 pp. 35-6）。

第一前提：

意味論的解釈において、人は正当な統語論に一致しないような隠された構造を前提することは決してない

第二前提：

ある論理形式の意味論的解釈の導出において、その意味論的解釈のあらゆる特徴はその論理形式におけるなんらかの意味値であり、また文脈独立的な構造規則を介して導入されるものでなければならない

この前提に従ったとしても、「本来の構造」に基づいた先の見解を維持することが出来ると Stanley は主張する。

まず、第一前提から帰結するのは、統語論に一致するような隠された構造であれば、意味論的解釈において前提としてもなんら問題はないということである。Stanley が考える「本来の構造」というのは、統語論を無視したようなものではなく、むしろ統語論にその根拠を持つような構造である。よってこの前提が先の見解を阻害することはない。ま

た第二前提は 2.1 の(b)で述べた意味論観とほとんど一致するものである。よってこの前提も問題のないものである。

では、真理条件的語用論の擁護者たちはこれらの前提からいかにして Stanley の見解を否定するのだろうか。まず、その真理条件的な解釈が文脈により媒介されるような（統語論的に適切な）言語的構造を取り上げて、そのような構造の論理形式の中に文脈により意味値が与えられるような表現や変項を求めることは、現代の統語論と整合的でないと主張する。そして第一前提を根拠として、適切な構造の真理条件的な解釈に対し文脈によって与えられる情報は、統語論的な論理形式に含まれるどんな要素の意味値でもないということを書く。また第二前提によって、その構造の真理条件的な解釈に対して文脈により与えられる情報は、意味論的な解釈の一部では全くないということを書く。最終的な結論は、そのような構造の文に対しては、意味論的な解釈は真理条件を導出しえない、というものである。

以上のような議論に対して、Stanley は、真理条件的語用論者が想定しているような言語的な構造が存在する適切な証拠はないと反論する。この応答の背景には、真理条件に対する文脈の影響は、曖昧性除去や論理形式の構成要素への意味値割り当てに限定されるという考えがある。真理条件的語用論によれば文脈はそれ以外の役割を果たしていることになるが、果たしてその根拠はどこにあるのか。文脈依存指示語⁽²⁾・代名詞・指示詞などを含んだ構造の真理条件が言語外的な文脈に影響を受けるとすれば、この種の文脈依存性は論理形式における明示的な文脈依存指示語・指標子・代名詞的表現の存在か、隠れた変項によって占められた論理形式の構造的な位置にトレースされるはずである。このように考えれば、広義の文脈依存指示語の解明以外に文脈が果たす役割を想定する明確な理由は無いことになる。

2.4 考察

以上、Stanley の基本的な主張である「言語外的な文脈により与えられるあらゆる真理条件的な影響は、論理形式へとトレースできる」という見解を、真理条件的語用論者たちへの Stanley の応答を通じて確認してきた。彼の主張とは、簡単に言えば、文は発話されている以上に複雑な統語論的構造を持っており、一見無造作に見える言語外的な文脈からの統語論的影響というのは全て、文が持つそのような「本来の構造」へとトレース出来るのだ、というものとなろう。それにより意味論が対象とする領域は、語の外延割り当てや意味値結合に加えて、発話された文の真理条件を含んだものと見なせるようになる。

意味論／語用論の論争に携わる多くの論者が、意味論に関わるものを語の規約的な意味

のデコードに絞って議論しているのに対し、Stanley のようにその統語論的な構造に着目する立場は珍しいものであると言えるだろう。確かにそのような構造が、(真理条件をしばしばもたらす) 語の文脈依存性を引き起こす要因となっているのであれば、文脈依存性を説明するためには語用論的な観点のみでは不十分となり、意味論的な観点からの説明が必要となろう。

とはいえ、この論文の中では文の「本来の構造」、つまりは論理形式とはどのようなものであるのかその具体的な姿は提示されてこなかった。それが提示されるのが次に紹介する Zoltan Gendler Szabó との共同執筆論文‘On Quantifier Domain Restriction’である。そこでは句構造標識を論理形式と捉え、そのような論理形式を用いた説明が、量化表現を含んだ発話に対しても妥当であることが主張される。

3. ‘On Quantifier Domain Restriction’ (本書 pp. 69–110)

3.1 量化ドメイン制限問題

文脈依存性の問題というのは、ある特定の状況下でなされた発話の解釈に対し、文脈がいかに関与しているかを説明するという問題であった。量子子のドメイン制限の問題はその特殊ケースである。次の文について考えてみよう。

(1) Every bottle is empty.

ある人が(1)の発話をしたと仮定しよう。このときその人が世界全体のビンが空っぽであることを伝えようとしているとは直観的に言って考えにくい。おそらくその人がいる部屋中のビンや、その人が最近買ったビンについて言及しているのだろう。適切な文脈であれば、その人はそのような命題を上手く伝えることが出来る。しかしそのようにして伝えられる命題がどのようなものであるかを、(1)の文脈不変的な言語学的特徴（音韻論的・形態論的構成要素、統語論的構造、含有する語の意味）が決定することはない。これらは発話がなされるあらゆる状況において不変であるが、話し手により伝えられる命題は状況により異なるからである。量子子のドメイン制限の問題が文脈依存性の問題の特殊ケースであるのは、それを解き明かすために、量化文の文脈不変的な言語学的特徴と共に、そのような文の発話により伝えられる命題、それも量化表現のドメインが適切に制限された命題の決定を文脈がいかにして手助けしているかを説明せねばならないからだ。

それを踏まえた上で、Stanley らが与えた説明がいかなるものであったかを確認していこう。

3.2 文脈はいかなる役割を果たすのか

Stanley らは文脈が果たしているとしばしば主張される主な役割として次の三つを挙げている（本書 pp. 76-81）。

1. 文法的役割：発話者により与えられた音韻論的な文、すなわち「発音されていること what is articulated」から文法的な文、すなわち「発話されていること what is uttered」を導出する働きを指す。この働きを図式化すると次のようになるだろう。
発音されたこと＋言語外的な文脈＝発話されたこと
2. 意味論的役割：「発話されたこと」から、そこに含まれる語の規約的な意味と共に、「発話されたこと」と実際に「言われていること what is said」を導出する働きを指す。この働きは次のように図式化できる。
発話されたこと＋言語的な意味＋言語外的な文脈＝言われていること
3. 語用論的役割：「言われていること」を素材として「伝達されていること what is conveyed」を導出する働きを指す。図式化すると次のようになるだろう。
言われていること＋言語外的な文脈＝伝達されること

以上の三つの分類を考慮するために、解釈プロセスの文法的・意味論的・語用論的段階に対応する心理学的な実在を想定する必要はない⁽³⁾。また 1～3 の順序で必ずしも解釈が行われるわけでもない。ただし、ここでは疑いなく正しいと思われる二つの前提を Stanley らは設けている。一つは、通常、コミュニケーションが成功している場合、伝達された命題を把握している聞き手は、発話された文も伝達された命題も把握しているだろうという前提である。もう一つは、通常、コミュニケーションが失敗している場合、聞き手は表現された命題や伝達された命題を把握せず、発話された文のみを把握しているか、あるいは、発話された文と表現された命題の両方を把握しているものの、伝達された命題を把握していないという前提である。

三つの役割がいかなるものであるのか、具体例に沿って確認しよう。先の(1)により伝達された命題と同じ命題を伝達することが出来る（と考えられる）、次の発話を導入する：

- (2) Every bottle I just bought is empty.

(1)と(2)は文脈が先の三つの役割の内どれを果たすかによって様々に解釈され得る。まず文

脈の文法的な役割を認めるなら、(1)と(2)で発音されていることは異なるものの、文脈が提供した付加的な要素が“I just bought”である場合、双方で発話されていることの間に違いはないことになる。次に、文脈の意味論的な役割を認めるなら発話された文は異なるが、表現される命題は同じであることになる。最後に語用論的な役割を認めるなら、発話された命題も伝達される命題も聞き手において実際には異なるものであることになる。

このように、文脈に対してどの役割を認めるかによって発話の解釈の仕方がかなり異なってくるのだ。文脈の役割が一つの争点となる理由はここにある。

3.3 量化ドメイン制限問題解決のために

量化ドメイン制限問題を解決するためには、文脈により果たされる役割が上記のうちのどれであるかを決定する必要がある。ここではその議論を確認する。

結論を先取りすれば、Stanley らが最終的に認めるのは二番目の意味論的な役割である。論理形式とは句構造標識であるという考え方もそこに由来している。ひとまずその議論は最後に回し、先に文脈に文法的・語用論的役割を認めることが何故不合理とされるのかを確認しよう。

3.3.1 文法的アプローチへの反論

文法的アプローチの最も妥当なバージョンによると、文脈は発話された文の発音されていない部分を提供するのみである。このアプローチの仕方を Stanley らは統語論的省略アプローチと呼ぶ。統語論的省略は次の例に端的に示されている。

(3) Sam plays chess on Sundays. Max does too.

この例では“plays chess on Sundays”が省略されていると考えられる。

統語論的省略アプローチでは、このような省略が(1)の場合でも起こっていると考え。つまり、“I just bought”が統語論的に省略された語である、つまりは音韻論的には明示化されない統語論的な構成要素であると見なされるのだ。

これを一般化すると次のようになる。つまり、(1)で「発話されていること」には「発音されていること」には含まれない要素 F があり、それが“every”という量子子のドメインを制限していることになる。よって(1)で「発話されていること」は、“Every bottle which is F is empty”となる。つまり、量子子のドメインというのはボトル全ての集合と F であるようなボトル全ての集合の共通部分でしかないことになる。そして要素 F が何であるかは(1)が発

話された文脈に依存することになる。

一見上手くいきそうなこのアプローチの最大の問題は、容易に過少決定性 *underdetermination* に直面してしまうという点にある。(1)で伝達された命題が(2)で伝達された命題と等しいものであるとしよう。その場合、自然に考えれば要素 F に当たるのは“I just bought”となるだろう。しかしその際に選ばれるものが“was recently purchased by me”や“is one of those things that I bought at the store”でない理由は何なのか。要素 F の機能は量子子のドメインを制限することのみなだから、同じビンたちに適応されるいくつかの述語の中から特定のもののみを選ぶ方法はこのアプローチでは明示されていない。つまり、われわれが直観的に要素 F を“I just bought”に限定する理由をこのアプローチは説明することが出来ないのだ。

まとめよう。問題とされているのは、発話された文の「発音されない構成要素」を特定する方法があるか否かであった。仮にそれが無いとすれば、聞き手は「発話されていること」が何なのかを知ることが出来ず、結果的に、意味されている命題がなんであるかを普通の仕方では知ることが出来ないことになる。つまり、そのドメインが発音されていないような量化文が発話されたとき、聞き手は伝達されていることを普通の仕方では決して知りえないことになってしまうのだ。また、「発音されない構成要素」を特定する方法があるとしたら、考えられるのは聞き手がこの表現を把握していないものの、発話された文のあらゆる発音された構成要素を知っているということである。そのような場合には、統語論的省略理論は、聞き手が普通の仕方では伝達された命題を知りえないという、奇妙な論理的含意をもたらすことになる。よって、文法的アプローチは妥当でないとされる。

3.3.2 語用論的アプローチへの反論

Stanley らによれば、語用論的アプローチに克服できない困難を突き付ける現象として、「量化文脈 *quantified contexts*」という現象がある。量化文脈とは複合的な量化表現を含んでいる文に伴う現象であり、複合的な量化表現というのは、その直観的な読みが次のことを前提することでのみ把握されうるものである。その前提とは、二番目の量化表現の量化ドメインを表現するインデックスが最初の量化表現によって束縛されている、という前提である。このような量化表現に対しては、語用論的なアプローチでは統語論的に表現された量化ドメインや、意味論的にもたらされた量化ドメインを前提することが出来ないため、直観的な読みが把握されえないことになる。次の例を考えよう。

- (4) In most of John's classes, he fails exactly three Frenchmen.

(5) In every room in John's house, every bottle is in the corner.

(6) Whatever John does, most of the class falls asleep.

これらの例では、二番目の量化表現のドメインは最初の量化表現の意味値によって異なる。例えば、(4)の発話で直観的に表現されている命題は、John の授業であるような x があり、その x のほとんどに対し、John は x における三人のフランス人を不合格にした、というものである。そのため量化表現“three Frenchmen”の量化ドメインは量子子“most”によって導入される変項の意味値によって異なる。つまり、“three Frenchmen”の量化ドメイン内の変項は、先行する量化表現によって束縛されているのだ。同様のことは(5)と(6)にも当てはまる。(5)では、量化表現“every bottle”が先行する量化表現“every room”により束縛されていると考えられるし、また(6)では、量子子“whatever”によって量化表現“most of class”が束縛されていると考えられる。

しかし文脈の統語論的な役割や意味論的な役割を前提できない語用論的なアプローチでは、以上のことを捉えられない。語用論的なアプローチに従って(4)を読むと、統語論や意味論を前提できないために、文の前半と後半を関連させて読むことが全く出来ないからだ。よって、語用論的なアプローチでは、(4)-(6)のような文が首尾一貫した命題を表現しているということがはっきりとは言えなくなるのである。このことにより、語用論的なアプローチを擁護する次のような標準的な議論は上手くいかなくなると Stanley らは考える。その議論に従えば、(1)の発話は実際のところ世界全体のビンについての命題を表現していると主張される。というのも(1)の発話に対してはいつでも「厳密に言えば、それは誤っているよ。世界には空っぽじゃないボトルが何本かはあるだろうからね。」という応答が可能だからだ。しかしこの議論はそれほど説得的ではないと Stanley らは主張する。というのも、量化ドメイン制限に対し文法的・意味論的アプローチをとる立場の人たちは、(1)の発話に対してそのような返答をする際、問題となっている文脈が変わっていると主張するだろうからだ。また、仮にこの議論が(1)に対しては説得的であると想定したとしても、(4)-(6)のような量化された文脈についてはやはり適用不可能なものである。例えば(4)に対して次のように応答することは整合的とは言えないだろう。「厳密に言えば、それは誤っているよ。というのも、John は三人以上のフランス人を不合格にしているからね。」これが整合的でないのは、John がきっかり三人のフランス人を不合格にしているのは、彼が担当する授業のほとんどにおいてであり、その合計は当然三人以上であるからだ。つまり、(4)の発話は誤っていないのである。そうである以上、こうした議論により擁護される語用論的なアプローチも妥当でないとされる。

3.3.3 意味論的アプローチ

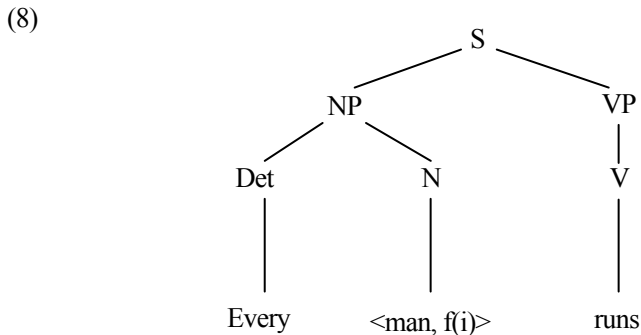
では、Stanleyらが採用する意味論的アプローチとはどんなものかを見ていこう。ここでもキーとなる考えは、文が持つ「本来の構造」、つまり発音されていない統語論的な構造⁽⁴⁾としての論理形式である。

一般的に意味論的解釈の対象となるのは、統語論が素描することを目的としているような性質を持った統語論的なメカニズムから出力されたものである。Stanley らはそのような出力こそが論理形式であると考え。論理形式は、字義的・構造的曖昧性を持たない、語タイプの秩序だった列のことであり、そこにおいて語タイプは意味論的性質と統語論的性質の両方について個別化されることになる。つまり、言語学の言葉で表現するならば、論理形式とは句構造標識なのである。

Stanley らは量化ドメインを句構造標識で扱うために、それを一つの文脈変項と考える。例えば、普通名詞がそのような文脈変項を伴う節点と併存すると仮定すると、次の文

(7) Every man runs.

は、句構造標識で次のように表現できる⁽⁵⁾。



“i”には文脈によって個々の対象が意味値として与えられ、“f”には“i”に与えられた対象から量化ドメインへの関数が意味値として与えられる。(7)の量化表現“every man”のドメイン制限は、文脈が“i”に与えた対象に対し、文脈が“f”に与えた関数を適用した結果、出力されるものとされる。

ここで注意しておかねばならないのは、Stanley らは量化ドメインを集合として扱ってい

るということだ。この場合だと、この発話がなされた時点の世界全体の“man”集合がそれに対応する。もちろんこの集合というのは発話で言及されている時間や世界が変われば変化するものである。

議論の詳細は省くが、いずれにせよこのような分析の仕方であれば、合成性に違反することもなく、また不要な指定物を考慮する必要もないとされる。そのため、Stanley らは最終的にこのようなアプローチを採用した。

3.4 考察

‘Context and Logical Form’と同様に、この論文でも文が持つ「本来の構造」という考え方を援用して、量化ドメイン制限の問題を Stanley らは処理しようとした。その際、論理形式を句構造標識と読み替え、量化ドメイン変項は、その対象となる名詞と同じ端末節点と併存する文脈変項として、その構造の中に存在するとされた。結論となる箇所を引いておこう。「(1)のような文がボトルについての制限されたドメインに関する命題を伝達できるのは、特定の文脈に関連して、その文がそのような命題を表現しているからだ。その文が特定の文脈に関連してそのような命題を表現しているのは、“bottle”という普通名詞が常に、ドメイン標識を伴って立ち現われてくるからだ。そこから導かれるのは、量化文の論理形式には、文脈と関連して、(しばしば制限された) 量化ドメインをその意味値として持つ変項が存在するということだ」(本書 p. 107)。文脈依存指示語・代名詞・指示詞のみでなく、量化ドメインですら、論理形式の構成要素の一部にトレースできるということだ。

量化ドメインがどのようにして制限されているかは、素朴に考えるならば、量化文が発話された状況によって、つまり語用論的に決まるもののように思える。しかし Stanley によれば、確かに最終的な決定は文脈を参照せねばならないけれども、それをいかにして決めるかは文の構造により最初から定められているということになる。仮にそれが正しいとすれば、量化文の真理条件（その導出には当然、量化ドメインの決定が必須である）も、意味論的に取り扱われるべきものの一つとなろう。

4. おわりに

これまで Stanley の二編の論文を概観する形で、彼の見解を順に見てきた。もちろん、その全てを描出することが出来たわけではない。今回取り上げた二編の論文の他にも、本書に含まれる他の論文には Stanley の意味論に関する重要な見解が数多く含まれている。とはいえ、意味論と語用論という、言語が持つ二つのインターフェースについて、Stanley がかなり独特な議論を提出していることは素描できたのではないかと思う。もちろん、彼の主

張が徹頭徹尾正しいものではないかも知れないが、意味論と語用論がそれほど明確に区分し切れるものではないことを、論理形式というアイディアを利用することで表現した意義は決して小さくないだろう。今後この論争がいかなる方向へと進んでいくかはまだ分からないが、彼がその渦中で今後も重要な役割を果たす人間の一人であることは間違いのないことであり、本書はそうした人物のアイディアを濃縮した書として非常に有益なものであると言えよう。

註

- (1) ここで言う「論理形式」には大きく分けて二つの意味があり、一つは Russell 的な意味での論理形式を指す。すなわち、自然言語は本質的に不完全なものであり、それを数学的・科学的に探究するためにそれと置き換えられるような、形式言語における論理形式のことである。もう一つの意味は、ある文の「本当の構造 *real structure*」である、というものである。すなわち、実際には発話されていないものの、本来その文が持っていると言われる構造を指す。この論文における「論理形式」は後者である。
- (2) 文脈依存指示語には二つの種類があると Stanley は主張する。それは、広義にはあらゆる文脈的パラメータのことであり、狭義には文脈依存的表現の真部分集合をさす。ここで言う文脈依存的表現とは「私」や「ここ」や「いま」のような語と特徴を共有するものであり、「これ」や「それ」や「彼女」や「彼」とは異なる。なお、文脈は広義の文脈依存指示語に対してその役割を果たすとされる。
- (3) 具体的な説明はなかったが、おそらく「発音されていること」や「発話されていること」を実際に解釈者が意識するかどうかを考慮する必要はない、ということだと思われる。これらの区別はあくまで理論的な抽象物の範疇を出ないということだ。
- (4) ここで言う「発音されない統語論的構造」は先の「発音されない構成要素」とは異なるものとされる。
- (5) ここで書かれた記号はそれぞれ、S は主語、NP は名詞句、VP は動詞句、Det は決定詞、N は名詞、V は動詞を示している。

〔京都大学大学院修士課程・哲学〕